

# 山と博物館

第59巻 第1号 2014年1月25日

市立大町山岳博物館



ガンガプルナ (7,454m・平成25年11月25日撮影)

## 豊穣の地

松原 繁

ネパール語で登り道は「ウカロ」、下り道は「オラロ」、平坦な道は「テルソ」。遙かネパールのアンナプルナに心を引かれたのは、一九五〇年にモーリスエルゾーク隊長率いるフランス隊が（いち）峰を北面から登攀し、登頂に成功（人類最初の八〇〇〇m峰の登頂）した著書『処女峰アンナプルナ』に出会ってからであった。

それから五十年が経つ二〇〇三年十一月六日、マルシャンディコーラを通り、トロンフエデーのロッジに着いた今、アンナプルナ山群とガンガプルナの氷河とヒマラヤの高峰が目の前にある。マナスル、ダウラギリ、アンナプルナの三つの八〇〇〇m峰を間に仰ぐことが出来るのも楽しみの一つである。四十年前二十九歳の若さで「帰国したら田舎の山岳会でも遠征できる山を見つけてくる」とダウラギリ峰を目指しながら雪崩に消えた岳友の慰靈をすることも出来た。

山旅も七日過ぎ、あと一日頑張ればトロンバス（五四三mの峠）を越えることの出来る長いオラロを歩く。桃源郷のムクチナートはチベット仏教のゴンバと、ヒンズー教の寺院が並んでいると言う。七十歳を越えたら必ず行こうと心に決めていたことが現実となり、自然に目頭が熱くなる。これは何なんだろう？ 今まで生かされてきたことへの感謝と夢を持ち続けることの大切さを知った故（ゆえ）だろうか。人は争いがなければ知恵と経験とで生きて行けることが、この地に来て身をもつて感じた。ただテレビが映り、バイクが走り、携帯電話が普及しつつある現実は、貧富の差を生み、争いの種になるような気もするが、自給自足の心は失わずにあつてほしいと思う。

オンマニテメフム（南無阿弥陀仏）

（天町山の会会員）

# 日本のヒマラヤ登山今昔

山森 欣一

## ヒマラヤとは

雪の住処と呼ばれる世界がある。標高7000mを超える萬年雪の山々は、寒冷と低圧の支配する世界であるが、その山麓にはラリグラス(石楠花)が咲き、コバニ(杏)がたわわに実る幽玄なる桃源郷でもある。

そこは北インドに昔から住む人たちによつて、「ヒマラヤ」と呼ばれた。古代サンスクリット語で、「ヒマ—リ雪」、「アラーヤ(アラーヤ)住居」であるという。

その場所はどこか。元々は、東のヤル・ツアンボー江大湾山脈(グレート・ベンド)から、西はインダス河まで約2400km、南は北インド平原から、北はチベット高原まで約160kmに広がつておらず、グレート・ヒマラヤと呼ばれた。次に南東から北西に走るカラカルム山脈も含まれるようになる。深田久弥はさらにヒンドウー・クシュ山脈も広義のヒマラヤに含め、彼の「ヒマラヤの高峰」には、パミール、天山、崑崙、大雪山脈も包含するとした。何故なら中央アジアの高地を除けば、地球上に7000mを超える山は一つもない。

私が二年間専従した日本ヒマラヤ協会(HAJ)は、「ヒマラヤ」地域だけを活動の対象とした団体である。1967年にH.A.J.が発足した時その地域は、ネパール、インド、チベット、パキスタン、中国、ソ連の7カ国であつた。

それがソ連の崩壊によつて、ソ連が消えカザフスタン、タジキスタン、キルギスが増え、現在は九カ国を活動の対象地域、しかし7000m峰は存在しない。



図1：主な7,000m峰所在位置図

いからである。

7000m峰～8000m峰が存在するヒマラヤを、大雑把に理解するには、英字の「Himalaya」を思い浮かべると分かりやすい。南北では、しの頭に当たる最北に位置する7000m峰は天山山脈のボベード(中国ではトムール)で北緯約42度、北海道の駒ヶ岳(函館付近と同緯度)である。緯線の下端にはヒマラヤ山脈のインド、ナダ・デヴィ北緯30度、屋久島の宮之浦岳付近の字の横線の中間点で南に位置するのが、世界

最高峰エヴェレストで北緯約28度、奄美諸島・徳之島の井之川岳付近に該当する。東西は、東経約102度横断山脈のミニ

亮吉1928年3月前穂高岳北尾根で滑落死亡。が今西錦司に送つた私信のあることを近藤信行が、岩波書店の『國書』六月号でその一部を発表し明らかにした。近藤からこの私信を見せられた田口二郎は、著書『東西登山史考』(岩波書店、1995)で以下のように推測する。今西が、激しい反対にもかかわらず白本山岳会への移譲をゆき合せをふと感じたからだ。一と結んだ。

ヤ・コンカから約87度のエヴェレストを経て、約72度のヒンドウークシュ山脈、ティリチ・ミルまで、直線で約2800kmに及ぶ「雪の住処」の大動脈を形づくつていて。(図1)

## 死せる大島亮吉は、生きる今西錦司を走らせたか

戦後、日本で初めてヒマラヤ登山の許可を取得したのは「マナスル」ではなく、意外にも1951年暮れにインドから福岡山の会に来たが、出発直前に取り消しになつた。

1952年、京都大学がネバールから「マナスル」の登山許可を取得した。しかし今西錦司は部内にある強硬な反対論を押し切り登山許可を日本山岳会に委譲した。表向きにはネバール側は①ナショナルチームを希望しているなど

であった。そして1956年5月9日マナスル学術探検よりも登山だけを歓迎しているなどは日本人によつて初登頂された。

ところが、1993年になり慶應大学の大島

マナスルを委譲した京大に鬱憤が溜まつて、1953年秋、京大は今西寿雄を隊長にアンナブルナIIに登山隊を派遣。登頂には失敗したがこれ以降各大学は、ネバール、パキスタンへと登山隊を派遣し、1965年までに京大はチヨゴリザ北東峰、ノシャツカ、サルトロ・カヌリ、アンナブルナ南峰に初登頂。ヒマラヤ(慶大)、アビ、サイバル(同大)、チャムラン(北大)、ゴジュンバ・カン(明大)と次々に成果を上げた。

この時代の日本のヒマラヤ登山最大の障壁は「外貨」であった。1958年の外貨のスポーツは十八万ドル、オリエンピック、世界選手権が優先された。登山に使用できるのはスポーツ、学術、一般しかないが、スポーツで登山に回るのは一部一万ドルであり、その審議を日本山岳会が握っていた。日本の社会の仕組みから大学系へ流れるのは自明のことであつた。これを打ち破つたのが一九五九年の福岡大学の登山計画であつた。それを契機にスポーツ外貨が社会人登山爱好者で組織する日本岳連にも割り当てられることになつた。こうして社会人登山隊によつてレンボ・カン、ギヤチュン・カン、タルケ・カンが初登頂されたのである。

## ネバール・ヒマラヤの閉鎖と再解禁、カラコルムのオーブン

ヒマラヤ登山は国境近くで行われる。平和でなければ登山隊に許可は下りない。インド／パキスタン、ネバール／中国、インド／中国、パキスタン／中国など国境を接する国の動静は重要だ。登山者は何時も国際政治に关心を持たざるを得ない。

1964年、ネバールは突然ヒマラヤ登山を禁止した。東京オリンピックを機に外貨が制

限付きながら一般に開放された。さあ、これがいた日本の登山愛好者たちは果然とした。しかし、登山者たちの立ち直りも速かつた。行き先は三つに分かれた。岩壁登攀を目指す人はヨーロッパ・アルプスへ。マスコミによつて三大北壁狂想曲が演出された。高峰登山を目指す人たちには、アラスカ、アンデスヒンドゥー・クシユがあつた。キスリングを担いでヒンドゥー・クシユに向つた登山者たちこそ幸せだつたかもしれない。ネバールやカラコルムに比べるとやや小振りながら、憧れていた「ヒマラヤ」の高峰が面白いように登れた。

残念なことが一つだけある。ヒンドゥー・クシユ登山の中には、今でいうアルパイン・スタイルに近いシンプルな登山もあつた。ところが再びネバールが解禁されると、この方法が忘れられマナスル以来の重々量登山が主流となつてしまつたのである。

（8,463m）  
東海支部隊が  
右）  
岳会も学校山岳部も長期凋落の一途を辿ることになつた。しかし多くの同人は結局社会人山岳会の域を越えることはできず、歴史が浅いだけに消えていくのに時間はかからなかつた。あとに残つたのは、集団の中で維持されてきた「リーダーシップ、メンバーシップ」の育成の場の欠落であった。  
だが、悪いことばかりではなかつた。1980年代に入り急速に社会の中に浸透した「個人意識」は、登山の本質に返ろう、シンプル登山を追求したいという一群の登山者を生み出した。これらの登山は、より困難な条件を課し、一石登り（フリーアルバイン・スタイル、高所登山）  
岳会同士が、気軽に手軽に登山を追求したり楽しむための「同人」が流行り、結局、社会人山岳会の域を越えることはできず、歴史が浅いだけに消えていくのに時間はかからなかつた。あとに残つたのは、集団の中で維持されてきた「リーダーシップ、メンバーシップ」の育成の場の欠落であつた。

峰のタウラギリ（1981年）、シシヤバンマ（1982年）でアルパイン・スタイルを確立した。（高山研究所「登山のルネサンス」山と溪谷社 1982）

小西は、1976年ジャスー北壁初登攀を大量登頂で成功させたが、それは、世界の登攀界では評価されないとし、8500m級峰の無酸素登山をめざした。1980年カンチエンジンカ北壁、1982年K2（チヨゴリ）北壁を無酸素で初登攀に導いた。仕上げは1983年エヴェレレスト南東稜から二名を無酸素で登頂させることに成功した。これは日本人による世界最高峰初の無酸素登山の成功である。同時に成功した他隊の3名のうち二名が墜死した事実からもエヴェレストの無酸素登山の困難さが分かる。

1985年には、ニューヨークのプラザホテルの会議で、「円高が容認され（プラザ合意）」かつての日本では「一生に一度」とされたヒマラヤ登山が、年に二度も三度も実践できる環境と

ンリに登頂したのは約一十年後の1975年であつた。その七十年代の中高年登頂者は6名であつた。それが八十年代に入ると田部井淳二が四十一歳を皮切りに、1987年までの八年間に延べ三十二名に達した。社会全体の高齢化に1985年のプラザ合意が拍車をかけ、日本のヒマラヤ登山者が増加、その中に中高年者が増えたのである。

8000m峰十四座の中で最後まで残つたのはシシヤバンマであつた。中国領であることから初登頂は1964年であつた。人類初の8000m峰アンナブルー初登頂から十五年経つていた。

この間を「ヒマラヤ・オリンピック或いは、ヒマラヤ黄金時代」と呼ぶ人もいる。

シシヤバンマを除く十三座のうち最後まで残つたのが、ダウラギリーであつた。その初登頂は1960年のスイス隊である。初登頂者のうちケルト・ディムベルガーは未だ健在である。

1970年、ネバールはヒマラヤを再解禁した。世界中の登山者が殺到した。日本勢も負けではないなかつた。マカルー南東稜、マナスル西稜、ジャヌー北壁を初登攀。P二十九、ダウラギリIV、ランタン・リレンを初登頂した。1974年、カラゴルムもオーブンした。国際政治が安定に向かつた証左でもある。未踏峰が面白いように登れた。資金力のある大学隊は奥地をめざした。テラム・カンリ、アブサラス、シンギ・カンリ、スキヤン・カンリを初登頂。社会人山岳会隊はアプローチは短いが困難な南面に取り付いた。そのため失敗も多かつたが、カンビレ・ディオール、K12、バトウラIV、スマリ・チツシユの初登に成功。

最終キャンプが800m前後に設けられる峰＝無酸素登山」をめざした。これらを実践するためには、マナスル以降踏襲してきた「シェルバ雇用、固定ロープ使用、酸素使用」を極力避け、登山者自身の身体の鍛錬をベースにした登山の実現が求められた。

ここに二人の改革者が現れた。原真（1936-2009）と小西政繼（1938-1996）である。共に現役の登山家として活躍していた。



なつた。この時代を代表するのか、世界最強の登山家との異名を持つ山田昇であった。

ちなみに、日本人の8000m峰登山者の数を見るとき、キーワードとして「二十」を上げることができる。すなはち、1956年マナスル登頂からほぼ二十年間（1976年）の延べ登頂者数が二十名。1977年～1979年の三年間で二十名。1981年一年間で二十名である。

中高年登山者の急増と高所遠足時代の到来

日本人の平均余命は1970年頃から急速に伸びた。その影響はヒマラヤ登山界にも現れ始めた。1956年マナスル初登頂した今西寿

彼は1957年にヘルマン・ブールらとブロード・ビーカーに初登頂しており、ブールと共に8000m峰二座初登頂の記録保持者でもある。ちなみに、初登頂ではないが、8000m峰二座に世界で初めて登ったのは、今西寿雄とマナスルに初登頂したギャルツェン・ノルブである。(前年にフランス隊でマカルーに登頂した。)しかし彼は、日本初のヒマラヤ登山遭難となつた1963年の大阪市立大学隊に参加し爆風による雪崩のため遭難死亡した。

## 中高年登山者の急増と高所遠足時代の到来

ヘビー・ウェイト（重々量）からライト・ウェイト（軽重量）へ  
1970年代に日本の経済が高度成長を続けると、社会の中に「個人」を主張し始める若者たちが増加し、1985年には会社の中でも「新人類」と位置づけされた。山の世界にも二

原は、1970年マカルー南東稜初登攀を指揮し、その報告書は後に続く登山者のバイブルとなつた写真1<sup>o</sup>。しかしそれを良しとせず、1976年バミールで短期速攻の実験登山を開始、以後低圧室での訓練にアンデス、アラスカ、ヒマラヤでの実験を繰り返し、フランスのリボリエ博士の理論を修正し、8000m

雄は四十一歳であつた。これはチヨー・オエー・初登頂者のヘルベルト・ティッヒーの四十二歳に次ぐ高齢者記録であり、今西の体力・気力がいかに優れていたかを物語るものである。

一般的に中高年とは四十歳以上を指すが、7000m峰以上の登頂者に限つてみれば、次に四十歳の太田鉄也が7000m低いテラム・カ

その形態はすぐにドイツに飛び火し、対象もチベットへの憧れもありチヨー・オユー・シシヤバシマを経て、最後は世界最高峰エベレストに集中することになった。1986年のことであつた私は、『岳人』633号(2000年3月号)で、私たちの登山と同じようにヒマラヤの高峰で、



写真1：マカルー（8,463m）  
1970年日本山岳会東海支部隊が  
初登攀した南東稜（右）

